

すべての人々が幸せでありますように

ひとびと しあわ

宮崎県立妻高等学校 二年
川崎海晴
かわ さき み はる

私は五大家族だ。父、母、姉、私、そして普通とはちよつと違う弟。弟は生まれつき心臓や精神面において、人より少し気を遣わなければならない。毎朝毎晩、薬を服用しなければならぬ。

私が初めて弟を「普通ではない」と感じたのは小学校二年生の時だった。

「弟って障がい者なの？」

友達が放ったこの一言に、私がどのような反応をしたのか、今では全く覚えていない。弟は私と同じ小学校の特別支援クラスに通っていた。だから友達はそのような発言をしたのだろう。また幼きゆえに、相手に対する配慮も悪気もなく、思ったことを口にしたのかもしれない。私が友達の立場だったら、同じことを言ってしまったかもしれない。ただ、今回は私が言われる立場だった。そして小学五年生になった頃、私は「普通」がわからなくなっていた。

あれは私が友達と仲良く、教室でおしゃべりをしていた

なった。私は楽しい毎日を送っていく中で、弟のことを極力友達に話さなかった。弟が「普通の人とは少し違う」ということを知られるのが怖かった。けれども二年生に進級した時、友達に弟がどの高校に通っているのかと聞かれた。私はあまり話したくはなかった。しかし大切な友達に嘘はつけないし、つきたくなかった。弟のことを他人にこんな話したのは初めてだったと思う。話した後の沈黙が恐ろしかった。もうダメだと思った時、友達は笑い出した。彼女は私に「変わらないさあ」と言った。そして私のことを大好きだと言ってくれた。私のことをいたわってくれた。これまでの私の思いを受け取って理解してくれた。私はこれまで毎日毎日怯えながら生きていたわけではない。ただ、私や弟のことを、誰かに受け止めてほしかった。私はこの友達を一生大事にしたいと痛いほど強く思った瞬間だった。

私は今、この機会に、私をこれまで大切に育ててくれた母に、初めてこのことを打ち明けたいと思っている。この文章を読んでもらいたい。母はどんな気持ちになるだろう。けれども私がずっと重く悩んでいたというように深く考えないでほしい。娘のいつものおみやげ話として読んでくれたら嬉しい。

そして私は「普通の人」って何だろうと思うようになった。私ははたして「普通の人」なのか、そうではないのか、今

時だった。クラスメートのやんちゃな男子が突然こう言った。

「お前も弟と同じ障がい者なんじゃないの？」

この言葉を聞いた瞬間、私は石のように固まってしまった。友達は私に気にしちやダメだよと声をかけてくれた。先生はその男子を叱った。その時私は思った。言われたように私は普通ではないのではないだろうか。混乱して、自分のことが自分でもよくわからなくなってしまう。このような感情が生まれたのは初めてだった。

私はそれから時々、自分は「普通の人」ではないのかもと思うようになった。親にも姉にも友達にも、もちろん弟にも話すことはできなかった。自分がわからなくなる小学生なんているのだろうか。その時の私は、とにかく怖くてしかたなかった。

中学校を卒業し、高校に進学した。高校では私の周りは一変した。知っている人がほとんどおらず、新しい環境にでも私にはよくわからない。ただ思うのは、人に障がいの有無を決定づけるのは、おそらくとても難しいということだ。私は今、生活に支障もなく毎日幸せを十分に感じて過ごしている。弟も同じだ、弟も毎日、たくさん思い出を作って、成長している。私たちに何の違いがあるだろう。隣にいる友達や先輩と、車椅子で電車に乗っている人との違いがあるだろう。皆同じように、日々喜怒哀楽を感じながら、自分の人生を一生懸命に生きている。誰かとかかわる時、最初から障がいの有無で区別するのではなく、まずは皆同じだという意識から始めたいと思う。少なくとも私はそうしたい。生きている誰しも同じ人間だから。そう考える人が増えることで、少しでも一人一人が平等である世界を築けたら、その世界はもつと美しくなるだろう。すべての人々が幸せでありますようにと私はいつも願っている。

自分の障害がつなげる共生社会

筑波大学附属聴覚特別支援学校高等部二年

小原はる

私は生まれつき重度の難聴者だ。中学校まで、聴覚障害者が通う聾学校ではなく、地域の学校に通う道を選んできた。選んだ理由は、地域の学校には友人が沢山いるから、というのが大きかった。勉強の進度が地域の学校より遅れている、生徒数が少ないなど、聾学校に偏見を抱いていたというのもある。一方で聾学校は少人数のため、皆が言っていることがわかり、かつわからないことを人に聞きやすいなどの利点もあることは知っていた。

私は、幼稚園の頃こそ活発だったものの、小学校では内気であった。大人数で友人が同時に喋っているため、友人の話していることが聞き取れず、話の輪に入りたくても入れなかった。また、当時の自分はわからないことを聞くのを恥じていたため、それがさらに壁となっていた。班活動でも、クラス全体の話し合いでも、皆の話している内容がほとんどわからなかった。

小学校卒業後、地域の中学校に進学した。小学校では耳

れるだろう、と判断してしまったのだ。

当然、初めて同じクラスになった人とのコミュニケーションは難しく、相手もどうしてよいのかわからない表情をしていた。「始めが肝心」ということが改めてよく身に染みだ。結局、それからあまり人と話すことのできない日々を過ごしていた。

そんな中、私に転機が訪れた。二年生の冬、国語の授業で人権作文を書く機会があった。私は、今までの学校生活でのコミュニケーションの不安や苦しさ、この気持ちをわかってもらえないもどかしさ、そういう溜め込んでいた思いが溢れ出すかのように、障害者の人権に関わる障害者の事件や自分の想いを書き綴った。そのようにしてできた作文をクラスの発表会で発表した。その結果、学年会で発表するクラス代表弁士に選ばれた。そして学年会で発表した時、他のクラスの同級生が驚いたような表情であったり、真剣に耳を傾けてくれたりしたのが視界の隅で見えた。そして、学年発表会の後から、同級生が話すときにわかりやすく話すように配慮してくれるようになったのだ。

これを機に、私はもつと自分の思いを誰かに伝え届けたい、と思うようになった。中学三年生では、コンクールに障害者の現状と扱いを題材にした作文を応募した。そしてなんと入賞することができたのだ。自分でも驚いたが、自分の思いを多くの人に伝えることができ、そして認められた

が聞こえないことを自分から説明できなかったため、中学ではコミュニケーションに困らないように、自分の障害について説明しようと考えた。始めが肝心だと思い、何度も何度も自己紹介の練習をした。

いよいよやってきた入学式当日、私は恥ずかしさと消え入りそうな気持ちで目一杯になりながらも、クラスの前で自己紹介や自分の障害を説明することができた。説明後、我に返って教室を見ると、少し笑顔でこっちを見てくれる人や、一生懸命な顔をして頷いてくれる人がいた。それだけで救われたような気持ちになれた。勇気を出して説明してよかったと思った。そのクラスでもとても楽しく過ごすことができた。「はるは、はるでいいじゃん」と言ってくれる、良き理解者もできた。

しかし、進級してクラス替えした二年生。私は新しいクラスメイトに自分の障害を説明しなかった。一年生の時の知っている顔もちらほらいる。説明しなくてもわかってくようで、欣快の至りであった。

入賞が決まり、問題は表彰式であった。今までの学校でのコミュニケーションを通して、話の内容を全てわかったと思うようになり、初めて手話通訳者の派遣を依頼した。手話通訳では専門用語もあり、わからない単語もあったが、声を聞くだけよりはるかに情報量が多くて感動したのを覚えている。また、手話通訳者の方がとても笑顔で優しく対応してくれたのが今でも記憶に残っている。さらに、市長が挨拶をするときに、「こんにちは」の手話をしてくれたのだ。私が賞状を受け取った後の拍手も、手話の拍手であったのだ。私は感動するとともに、驚きを隠せなかった。目を見張っていたであろう私の顔を見た市長は、柔らかく笑って、「手話を覚えたんだよ」と、言ってくれた。入賞よりも手話をしていただいたことが、とても嬉しかった。

表彰式を通して、手話で対応していただけたことに対して喜びを感じ、かつ聴覚障害者としての配慮を受けられることに興味を持ち始めた。そして、聴覚障害に対して前向きに考えられるようになったのは、表彰式に限らず、自身の聴覚障害に対して理解を示してくれた中学校の同級生や先生方がきっかけだ。

現在、私は聾学校に通う高校生だ。学校生活では多くの視覚的な情報保障が当たり前のようにあり、日常的に手話

を使う生活になっている。しかし、中学校での経験を思い出せば、情報保障を受けられる喜び、そしてその情報保障に関わってくれる人がいることの感謝の気持ちを忘れないようにすることができている。

私は将来、聴覚障害者と健常者との架け橋になりたいと考えている。健常者に対しては、聴覚障害についての見識を広げ、理解を深めてもらうために、小さい頃から学校で手話に触れる体験や、聾学校との交流の場を設けるべきではないかと思う。また、健常者との壁をなくすためには、障害のある人でも飲食店や営業店のレジなど接客の場に積極的に立ち、コミュニケーションの時には指差しで協力してもらおうなど、健常者との触れ合いの場を増やして行くべきではないかと思う。そして、多くの人が障害の有無に関わらず、相手を思いやり、積極的に助け合うことで、共生社会が実現するための一歩になるのではないかと考えている。

プールの授業と手術跡

じゅぎょう

しゅじゅつあと

栃木県立のぞわ特別支援学校高等部二年

清水あろあ

私は、小学校と中学校は地域の学校に通っていました。体育祭や文化祭などの行事、委員会や部活など、様々な活動を経験しました。私は学校が楽しくてクラスメートも、部活仲間も大好きでした。でも、私には唯一嫌いな時間がありました。それは、プールの授業です。なぜかというところ、私の足や股関節には、数えきれないほどの傷があるからです。それは、今までに数回行った手術の跡です。

普通の人からしたら、「暑いときに冷たいプールで楽しく泳げるから好き」や「泳ぐのが得意だから好き」のような意見が出るかもしれませんが、でも私は、プールの授業が嫌いでした。なぜなら、今までに受けた手術の傷がみんなに見られることや、装具をつけていない、はだしの姿を見られたくなかったからです。だから、なるべく傷が見えない姿勢で、傷を隠しながら過ごしていました。先生の話や準備体操が終わり、いざ入水の時間になりました。周りの友達や補助の先生と、「水が冷たいね」と話していた時、周り

遊びに行こうね」と。もちろん、「うん!」と返事をしました。その子とは進学先は違います。でも今も、体の調子など気にかけてくれています。こんなにやさしく、寄り添ってくれる人がいるということに感謝です。

私はこの体験を通して、手術跡や自分が障害者であるということに不安やコンプレックスを感じている人に、「一人で悩まないで」、「寄り添ってくれる人がきつというよ」、「私はあなたの味方だよ」と伝えたいです。また、これから手術を受ける人で、学校や職場に戻った際の、周りの反応が気になる人にも、「安心して手術を受けて大丈夫だよ、手術跡はあなたがその手術に耐えた証拠だよ。だから前向きに考えて。」と言ってあげたいです。「手術」という言葉を聞いた時、マイナスなイメージではなく、その人の頑張りをたたえる印だと認識していただけたらと思います。

私には夢ができました。誰かに夢や希望を与える存在になりたい、と。この作文を書いたときちょうどオリンピックピックが行われていました。もし私がメダリストになれなくても、メダリストのように感動を与える、努力する前向きな姿を見てもらいたいです。

最後に。

この作文を読んで障害者に興味を持つたり、誰かが夢を持つきっかけになったりしたらとてもうれしいです。この作文は、私の実体験をもとに書いています。なので、これを

にいる友達の表情が、少し暗くなったのです。それは、私の足にある手術の跡を初めて見たからです。私は、「あつ」と思いました。なぜなら、その傷を見た友達に気持ち悪いと思われなくなかったからです。でも、傷を見た友達から、意外な言葉が返ってきました。それは「あろあちゃん足の傷、すごく大きいね。」と言われ、やつぱりそう思うんだと落ち込みそうになったとき、その子が続けて「でも、それくらい大変な手術にも耐えて、いっぱいハビリも頑張ってきたんだね。」と言われ、私はとてもうれしく思いました。手術をした時期に会っていなくても、頑張りをたたえてくれる人がいるということが。

今まで、手術跡にコンプレックスを感じていた私に、頑張った証拠だと教えてくれた友達とは、今でも大親友です。それからは、プールの授業を心から楽しめるようになりました。私は大親友と、中学の卒業式にこんなことを約束しました。「大きくなったら、二人で免許を取って、海に読んだみなさんがどのような考えを持っていてもいいと思います。「十人十色」という言葉のように意見はこの世界に存在する人の数だけあつていいと思います。

障がいしょうがいの壁かべがない世界せかいを山形県立東桜やまがた学館とうおう高等学校三年深瀬ふか萌も心み

私の兄は、知的障害を伴う自閉症である。大きな声で独り言を言ったり、父母が作ったタイムスケジュールがなければ次に何をするか分からずパニックに陥ったりしてしまう。こだわりが強く、一つのことに集中してしまうと周りのことが見えなくなってしまうのだ。しかし、これを逆にして考えると、自分の好きな事、得意な事には、とてつもない集中力を発揮できるということだ。兄もその一面を持つている。例えば、兄は生き物が好きで、好んで多くの場所を訪れては、写真を撮って自分だけの手作りの図鑑を作っていた。図鑑のページも一から作って、これまで様々な種類の図鑑を自作してきた。自分の好きなことに熱中している姿はとても輝いているように見えたし、生き生きとしていた。他に、私が兄をすごいと思うのは、記憶力だ。図鑑を私に紹介してくれる時に、何年も前に訪れた場所にもかかわらず、「何年何月何日何曜日に行きました」と、はっきり教えてくれるのだ。いくら記憶力に自信のある人で

いのままに働くことが出来ず、日々行動範囲が狭まる兄のことが気がかりでならなかった。

兄の小学校時代の先生から、兄の同級生が特別支援の先生を目指して頑張っているという便りが来た。学校での兄と過ごした経験が繋がっているという。さらに、他の同級生は、兄を見かけてわざわざ声をかけてくれた。兄も頑張っているから俺も頑張ると、兄の存在は励みになっているという。そして自分の友達だからと躊躇なく声にくれた。時を経ても、兄が関わってきた人たちの心に、兄の存在が残っているのは、兄本人だけでなく私たち家族も報われているような気がした。

そんな時、オリンピック聖火リレーのサポートランナーとして走る機会に巡り合えた。なかなか会えなかった仲間やお世話になった先生に頑張っている姿を見せたいと走る事を決めた。今この現状だからこそ、走ることが好きだった兄に元気な姿を取り戻してほしかったが、親としては介護がなければ難しいという心配があった。私は、小学校時代に兄が友人と楽しく走っていたことを思い出し、本人の良いきっかけになるならサポートしたいと思い、兄と一緒に走ることを決めた。

家の周辺を、歩きと走りを繰り返しながら四十分かけて一周したり、実際のコースを体験したり練習を重ねた。兄の手を私の腕に乗せて誘導すると、兄はとても楽しそうに

も、そこまで記憶していることはないだろう。これは人に誇るべき特性である。

兄は、特別支援学校を卒業した後、就労支援施設に通った。自分の好きな料理やお菓子作りを生かした仕事が出来ると期待していたが、現実はそううまくいかないものだった。兄が楽しみにしていた作業は、難しく時間がかかり、誰かがついていないと出来ず、職員はみんなの工賃のために数をこなさなければならぬから個別に対応出来ないと言われた。実際、兄が望んだ作業は出来なかった。施設では何をするのか事前に目に見える化する支援はなく、家庭で対応するにも施設から作業予定の情報が得られず限界があった。少しでも出来ることが増えるように練習して、長い目でみてほしいと願い出たが受け入れてもらえなかった。さらに、施設には、兄が苦手とする人がおり、行くことが億劫になってしまった。次第に兄の笑顔は減り、夜中眠れずにいることも増え、施設にも通えなくなった。思

一緒に走り切った。私は、ふと兄の妹で良かったという思いを感じた。今まで自分自身、兄のことで悩むことが多く、なんで私かと思うことがあったのも事実だ。それでも、兄が生き生きとしているのは、この上ない喜びだった。聖火リレーの担当の方は、親身になって寄り添ってくれ、当日の進行やユニホームなど、本人の不安を減らそうと協力してくれ、事前にしっかりと準備を整えることが出来た。

当日は、私が傍にいて兄が不安にならないように、一緒に予定表を確認し次に何をするか丁寧に伝えた。兄は終始安心したように、私に図鑑の話をして出番を待っていた。出発の時、いつも通りに私の腕に手を乗せて握り足を弾ませ笑顔で走っていた。他のランナーが手を振ると兄も一瞬手のひらをあげた。何気ないことだが、兄にとつてはすごいことだ。私は嬉しさと胸がいっぱいになった。

あつという間の時間だったが、兄にとつてすごく大きな一歩となった。走り切った兄はとても清々しく充実感が感じとれた。担当の方に頑張ったねと言われ、兄は、僕走りましたと声を弾ませ答えた。帰り際、見知らぬ地域の方からも「良かったよ、お疲れさま」と声をかけてもらい、そこには兄が障がい者であるという線引きはどこにもなかった。今もオリンピックの映像を見るたびに自分も走ったという思いが兄を笑顔にさせている。多くのサポートがあつてこそ叶えることが出来た。兄の力になり、また誰かの力に

なっている。そして私自身にも大きな力になった。

健常者と障がい者の大きな違いは「障害」である。障害とは心や身体上の機能が十分に働かず、活動に制限があることである。一般の人とは違っているという前提があり、「特別」に見ているということだ。一人では生活できない、手助けを必要とするというイメージが必ずしも無いとは言えない。しかし、その「特別視」することが間違っていると考える。つまり、ノーマライゼーションの考えを広げていくことが必要なのだ。障がいの方と関わる時、まずは「障がい者」としてではなく、一人の人間として見てほしい。そういった視点を獲得するためには、インクルーシブ教育を広めていくことが一歩だと考える。皆の心の輪が広がることで、「障害」の壁が消えた世界、個性を認め合うフラットな共生社会が到来することを願っている。

人助け＝良いこと

ひとだす イコールい

富山県立南砺福野高等学校二年

松井彩吹

ある日の、帰り道だった。電車通学の私は、最寄り駅で降りて、家に帰る。帰りは、向かい側のホームに行かなければならないので、階段を登る。普段通り電車を降り、階段を登ろうとしたときだった。荷物を持った七十代くらいのおばあちゃんがいた。おばあちゃんは、とても辛そうな顔をして、階段を一段、二段とゆつくり登っていた。田舎に住んでいる私は、老人が階段を登っている光景には、見慣れていた。困っていたら声をかけるのも普通だった。私は、いつもと変わらず、

「大丈夫ですか？ 何かお手伝いしますよ。」

と、声をかけた。するとおばあさんは、

「なん！ 私できるわ！ 助けなんかいらん！」

と、私に強く言い放った。まさかそんなことを言われるとも思わず驚いた。ただ、人助けをしたかっただけなのに。人助け＝良いことと思っていた私は、少しショックだった。でも辛そうで、今にも泣き出しそうなおばあちゃんを放つ

なったりして酸素が十分に行き渡らん病気がいぜ。そうやさかい、間欠性跛行言う症状出るもんで。」

もう、わけがわからなかった。

「歩くことはできる。でも、痛て痛て。少し休めば歩けるよくなるんやけど……。」

そうおばあちゃんは説明してくれた。聞いたことのない病気に症状が脳内をぐるぐると回る。こんなところで話しているもキリがないと思えばあちゃんに声をかける。

「おばあちゃん。ゆつくりでいいので、あつちのホームに行きましよう。ベンチに座って話ませんか？」

おばあちゃんは、少し元気そうにそうしよかと、言った。ゆつくり一段ずつ、休憩しながら、反対側のホームに渡った。改札をぐりぐりベンチのある待合室に行き、二人でゆつくりと腰かけた。

「さつきは大きな声出してごめんね。恥ずかしいことやけど、できんこと認めたくなくて。人に助けてもらうと自分に障害がある言うて、実感してしまうのが怖くて。」

声の大きさがだんだん小さくなってるのがわかった。そのときやつと気づいた。なぜあるとき大きな声で言われたのが。気づくと同時に悲しくなった。特に障害を持っているわけでもない。でも、なぜか悲しくなった。気持ちが悪くわかったから。できないことから目を背けたくなくる気持ち。私は、おばあちゃんのシワだらけの手を握つ

ておくことはできなかった。私の中で引つかかった言葉は、でも何か助けてあげたいという気持ちに変わった。

「じゃあ、そばにいさせてください。何もしません。そばで見守らせてください。一人ぼっちより人がいた方が良いでしょう。いいですか。」そう言うと、渋々うなずいてくれた。ゆつくりと階段を登り踊り場まで行ったときだった。

おばあちゃんは、スツと力が抜けたかのように、膝から崩れ落ちた。突然のことに驚き、急いでおばあちゃんを支えた。おばあちゃんは、少しほほえんで静かに話し始めた。「私、閉塞性動脈硬化症でね。難しい名前やろ。その病気のせいで足が悪くて。よくこういうことが起きるんやちゃ。ごめんね、びつくりしたやろ。」

難しい病名がスラスラと並べられ、おばあちゃんの話についていくのに必死だった。そんなことにかまわず、おばあちゃんは話を続ける。

「まあ簡単に言うたら、下半身の動脈が詰まったり、狭くた。その気持ちわかります。おばあちゃんほど、大きなことじゃないけど。障害があってもなくても気持ちは変わらないうんですね。」

おばあちゃんは少し嬉しそうに手を握り返してきた。心がつながった気がした。障害の有無に関係なく、一人の人間として尊重するべきだと思った。「強く当たってごめんね。あなたみたいな人で良かったわ。本当は嬉しかったのよ。認めたくなかっただけで。あなたみたいな人が増えると良いわね。障害の有無によって辛い思いをする人もたくさんいるから。ありがと。」

おばあさんは、ゆつくりと立ち上がり荷物を持ってタクシーに乗って行ってしまった。最初に見たときは正反対な笑みをうかべていた。心があたたかくなったような、チクリと痛んだような。障害の有無は仕方ないと言ってしまう、そこまでだ。でも、接し方や考え方によっては、全く変わらない一人の人間だということを忘れてはいけない。障害にも様々なものがある。未だに、身体障害者は、接することができると、知的障害や精神障害の人は怖い、接しにくいと言う人がいる。正直私も少し前まではそう思っていた。でも、接してないだけで同じ人間だし、一日の価値だって、命の価値だって変わらないと思う。

全員じゃなくていい。考え方に違いがでてくるのは当然

のことだから。でも少しでも偏見がなくなってほしい。みんなが対等に生きることができるよう。人助け＝良いこととは、間違いではないけど、慎重に考えていかないといいない。私の頭の中は、そのことでいっぱいだった。